

## *Sense and Sensibility* におけるシスターフッド

武田美保子  
渡部祥子

Jane Austen (1775–1817) の作品である *Sense and Sensibility* (1811) においては、これまで Dashwood 家の姉と妹のそれぞれが sense と sensibility の各属性を備えているとして解釈されることが多かった。<sup>1</sup> しかしながらテクストを詳細にみていくと、姉妹それぞれに両方の属性が存在していることが読み取れるに違いない。<sup>2</sup> 姉の Elinor は当初、女性たちや男性たちとの関係の中できわめて sense に富む人間のようにみえるのだが、好意を寄せていた Edward の婚約者である Lucy との接触により、以前には読み取ることが出来なかった sensibility を備えている一面も見え、時に妹の Marianne よりもその属性を強く備えている可能性を持つことが分かってくる。しかしながら最終的に彼女は、Lucy との交流によって、理性的な面だけでなく、感受性もほどよく持ち合わせた人物となっていく。一方、妹の Marianne は、異性との関係や日常の生活においてその sensibility が際立つ人物だと見なされているのだが、小説の最後には「感受性」だけではなく、本来持ち合わせていた理性的な面も表面に現れ始め、小説の半ば以降大いに変化がみられる。それゆえ本論文では、Dashwood 姉妹と sense と sensibility との以上のような側面に注目しながら、姉妹と彼女たちを取り巻く人々、特に男性たちとの関係や姉妹関係について考察することで、この小説の人間関係の描き方や、小説の特徴について考察していくことにしたい。

まず初めに Dashwood 姉妹と男性たちとの関係性に注目していきたい。この小説は一般的には恋愛小説と考えられ読まれているが、われわれ読者は時

に、果たしてそうなのだろうかと疑問を抱いてしまう。というのも、恋愛小説という割には、小説の中で彼女たちと恋人と呼ばれている男性たちとの接点が非常に少ないからである。小説は最終的に Elinor と Edward の結婚で終わっているが、Elinor が彼と一緒に過ごしている場面はほとんどなく、ふたりが恋愛関係にあるとは断定しにくい。更に、Marianne が最終的に結婚相手として選んだ Brandon 大佐と彼女の結婚に至るまでの過程は、詳しく書かれることはない。恋愛小説と呼ぶには、登場人物たち相互の関係があまりにも不明確だといえるだろう。

前述の通り、Elinor は Edward と最終的に結婚する。知り合った当初は、お互いに好意を寄せあう関係のようにみえるが、実際の二人の会話などはあまり描かれていない。また、Edward の秘密の婚約者である Lucy の存在によって Elinor は精神的苦痛を受け、Edward との関係は微妙なものとなる。そして、Elinor 自身、彼に恋人として見られていないと感じさせられる、以下のような描写がある。

His coldness and reserve mortified her severely; she was vexed and half angry; but resolving to regulate her behaviour to him by the past rather than the present, she avoided every appearance of resentment or displeasure, and treated him as she thought he ought to be treated from the family connection.

(Chapter 16)

Elinor にとって Edward という人物は冷淡な恋人であり、私達読者も果たして彼が本当に Elinor を愛しているのか確信を持ってない。その一方で、Elinor 自身にも問題があるようにも感じられる。Elinor が Edward を愛しているのは確かだが、好意を寄せている Edward ではなく、妹に好意を寄せている Brandon 大佐と、Edward 以上にひんぱんに会って話をしているのである。Elinor の Brandon 大佐についての考えは次のように書かれている。“She liked him — in spite of his gravity and reserve, she beheld in him an object of

interest” (Chapter 10)。Elinor が Brandon 大佐と一緒にいる場面は非常に多く、Marianne と Willoughby が Brandon 大佐のことを悪く言った際には、Elinor は次のように彼らに反論している。“I can only pronounce him to be a sensible man, well-bred, well-informed, of gentle address, and I believe possessing an amiable heart” (Chapter 10)。もし Elinor が理性的で、本当に Edward のことを愛しているのならば、Brandon 大佐とばかり過ごすのは控えるだろうと思われるのだが、決してそうではない。

Colonel Brandon, who had a general invitation to the house, was with them almost every day; he came to look at Marianne and talk to Elinor, who often derived more satisfaction from conversing with him than from any other daily occurrence, but who saw at the same time with much concern his continued regard for her sister. (Chapter 27)

それゆえわれわれ読者は、もし *Sense and Sensibility* が恋愛小説ならば、Elinor は、Edward ではなく Brandon 大佐と恋に落ちるのが自然な展開ではないかと感じてしまう。また、私達読者だけでなく、彼女の周りの登場人物達にも彼らの関係は誤解されてしまう。実際に、Sir John によって Elinor は次の様に言われる。“He seems a most gentlemanlike man; and I think, Elinor, I may congratulate you on the prospect of a very respectable establishment in life” (Chapter 33)。これに対し、Elinor ははっきりと、“I am very sure that Colonel Brandon has not the smallest wish of marrying *me*” (Chapter 33) と述べている。そのため、Elinor と Brandon 大佐の関係を正確に理解するには詳細な観察が必要なのだが、それにより初めて、彼女にとって妹の存在がいかに重要であるかが分かるのである。

一方、妹の Marianne は、姉の Elinor より恋愛に対してはるかに情熱的で、自身の感覚を重視する sensibility 溢れる女性である。しかしながら彼女は、いろいろな経験を経ることにより、より分別を備えた女性へと成長をとげ、

結果的にはこれまで全く眼中になかった Brandon 大佐と結婚することになる。小説の前半で、彼女は、Willoughby と音楽の趣味など多くの点で意気投合し、激しい恋に落ちる。その Marianne にとって、Brandon 大佐は当然のことながら恋愛の対象外であり、結婚相手とも考えられないので、“thirty-five has nothing to do with matrimony” (Chapter 8) と姉と母親に言っている。ところが彼女は Willoughby と別れ、命を落としかねないほどの病気になって回復後、大佐に対する考えを改め、小説の最後には彼と結婚するという選択をする。彼女がこのようなようになった経緯は全く書かれておらず、Brandon 大佐自身の Marianne に似たかつての恋人への以下のような思いも、姉である Elinor に告げられるだけである。

my affection for her, as we grew up, was such, as perhaps, judging from my present forlorn and cheerless gravity, you might think me incapable of having ever felt. Her's, for me, was I believe, fervent as the attachment of your sister to Mr. Willoughby, and it was, though from a different cause, no less unfortunate. (Chapter 31)

それゆえ大佐の情熱を一番よく知っているのは、彼の最大の理解者である姉の Elinor なのである。寡黙そうに見える Brandon 大佐が Marianne への思いを熱く語るのは、彼の中にも彼女と同質の sensibility があるからである。もし彼女が Brandon 大佐の熱い思いをもう少し知っていたら、彼をあれほど邪険にすることなく接したのではないかと思われるが、いずれにしろこの小説においては、異性との恋愛は中心的に描かれてはいないことがわかるだろう。

彼女たちの男性との関わりは、当然のことながらこの小説の題名となっている sense と sensibility とも深く関係している。先に述べたように、Elinor は sense、Marianne は sensibility とその属性がおのおのに振り分けて考えられがちであるが、この小説の終わりには、それぞれ前半とは違った様子が見

られる。当初、特に Elinor はこの小説において「分別がある」、「教養があり、知的である」、そして「冷静に判断が出来る」人物として描かれている。しかし、Elinor のこのような状態は小説が進むにつれて変化していく。その直接の理由は、Elinor が思いを寄せている Edward に Lucy という婚約者がいたことである。彼女は Elinor よりも無教養であり、分別がない。Elinor 自身、彼らの婚約は信じられないものであった。実際に、彼女と会った時に、Elinor は次の様に彼女を観察している。

Elinor, saw, and pitied her for, the neglect of abilities which education might have rendered so respectable; but she saw, with less tenderness of feeling, the thorough want of delicacy, of rectitude, and integrity of mind, which her attentions, her assiduities, her flatteries at the Park betrayed; and she could have no lasting satisfaction in the company of a person who joined insincerity with ignorance; whose want of instruction prevented their meeting in conversation on terms of equality ... (Chapter 22)

自分よりも様々な点において劣っている Lucy が Edward の婚約者であるはずがないと思い、それが嘘である証拠を彼女との会話の中を探ろうとする。しかし、それが真実であることを知り Elinor は、今までに感じたことのない「動揺」と「悲しみ」を感じ、「屈辱と衝撃と敗北感」に打ちのめされてしまう。また Lucy の次のような言葉は、彼女の分別を失わせてしまう。“Though you do not know him so well as me, Miss Dashwood, you must have seen enough of him to be sensible he is capable of making a woman sincerely attached to him” (Chapter 22)。この Lucy との出会いが Elinor の精神的なバランスを少しずつ崩していく。彼女は分別を維持しようとしているが、次第に分別のある態度を保てなくなっていくのである。

Elinor は、Edward の視点を想定しながら Lucy と自分を比べ、彼女が婚約者だという事実を信じようとしなない。Elinor は Lucy から秘密の婚約の話が聞かされる際に、一見分別のある態度を保ちながらも、時にはあからさま

な程感情的な態度も見せている。このように「分別がある」とみなされていた Elinor にも「多感な」側面があるということがわかる。この時彼女の感情的な態度は、異性である Edward よりもむしろ同性の、無教養な Lucy に向けられていることもまた、この小説における異性関係の希薄さを立証しているといえるだろう。

妹の Marianne に関しても、小説の最初と最後で彼女の特徴には変化が見られる。彼女は前述の通り、「多感な」女性であると見なされている。その証ともいえるような Willoughby との交際に際して、Elinor はもう少し分別を持つようにと Marianne に注意している。しかしながら以下のように考えている妹はその注意に全く耳を貸そうとはしない。

Marianne abhorred all concealment where no real disgrace could attend unreserve; and to aim at the restraint of sentiments which were not in themselves illaudable, appeared to her not merely an unnecessary effort, but a disgraceful subjection of reason to common-place and mistaken notions.  
(Chapter 11)

更に恋に恋をしているといってもよい Marianne は、“When he was present she had no eyes for any one else. Every thing he did, was right. Every thing he said, was clever” (Chapter 11) と、他の人の意見を聞ける状態ではなかった。だからこそ、失恋した時に受けた痛手は大きかった。Marianne が Willoughby と別れた際の感情的な様子は以下のように描かれている。

it was many days since she had any appetite, and many nights since she had really slept; and now, when her mind was no longer supported by the fever of suspense, the consequence of all this was felt in an aching head, a weakened stomach, and a general nervous faintness.  
(Chapter 29)

このようにその悲しみは、極めて身体的な反応として提示されている。

Marianne は失恋によって病気になってしまうが、この病気を経て Willoughby と Brandon 大佐の過去を Elinor から聞いた後、彼女の態度は大きく変化する。

The day of separation and departure arrived; and Marianne, after taking so particular and lengthened a leave of Mrs. Jennings, one so earnestly grateful, so full of respect and kind wishes as seemed due to her own heart from a secret acknowledgement of past inattention, and bidding Colonel Brandon farewell with the cordiality of a friend, was carefully assisted by him into the carriage of which he seemed anxious that she should engross at least half.

(Chapter 46)

Marianne は、これまで無愛相な態度を取ってきた Mrs. Jennings に対して心から感謝の意を表明し、大佐に対しては敬意を持って接し始める。その上彼女は、Elinor が思いを寄せている Edward に婚約者がいて、その婚約者が自分たちとは比べものにならない程無教養であり、我慢のできない Lucy であるという事実を知った後は、自分が Willoughby と別れた時にとった行動と Elinor の行動を比べ、自らの行動を恥じている。Elinor は、Edward と Lucy の秘密の婚約を知った時、それが秘密であったために誰にも言えず、一人で悲しみと惨めさに耐えなければならなかった。一方、Marianne は感情を隠すことなく表し、病気にまでなっている。そのため Marianne は、いかに自分が軽率に行動をしていたのかと反省をする。“She felt all the force of that comparison … with all the pain of continual self-reproach, regretted most bitterly that she had never exerted herself before” (Chapter 38)。さらに Willoughby に対する考えは、病気の前と後とで大きく変わっている。以前は、彼女は周りが彼のことを悪く言っても、Willoughby のことを悪く言わず、むしろ周りを悪者にし、彼をかばっていたが、病気が治り落ち着きを取り戻すと、彼との交際を振り返り、その思いを姉の Elinor に述べている。“I have nothing to regret — nothing but my own folly” (Chapter 47)。Marianne はこ

のように *sensibility* が全面的に出ていた以前の彼女ではなく、*sensibility* と *sense* がバランス良く身に付いた女性となる。

Marianne のこの成長は、その後の男性との関係にも大きな影響を与えている。彼女は Dashwood 夫人も Elinor も、Brandon 大佐が今までに Dashwood 家にしてくれたことに対して恩を感じており、彼の元へ Marianne を嫁がせることで彼へ恩返したいと考えていることを察知する。そんな家族の考えを Marianne は無視出来ない。Marianne 自身、Brandon 大佐が立派な人物であると知っており、彼の気持ちにはっきりと気づいた今となっては、彼の申し出を断ることが出来なかった。小説の中で、Marianne の感情は次のように描かれている。

Marianne Dashwood was born to an extraordinary fate. She was born to discover the falsehood of her own opinions, and to counteract, by her conduct, her most favourite maxims. She was born to overcome an affection formed so late in life as at seventeen, and with no sentiment superior to strong esteem and lively friendship, voluntarily to give her hand to another! — and *that* other, a man who had suffered no less than herself under the event of a former attachment, whom two years before, she had considered too old to be married, — and who still sought the constitutional safe-guard of a flannel waistcoat!

(Chapter 50)

上記のように、「分別のある」面も身につけた Marianne 自身が選んだのは、自分のための幸せではなく、家族のためのものであった。

小説はこのように、恋愛物語が主軸になるような終わり方になっていない。先に述べたように、Dashwood 姉妹と男性との関わり方はかなり表層的で、彼らは主に家族が幸せになるために必要な存在でしかないようにみえる。言い換えれば男性との関係よりも、女性同士の関係の方を重視しているようにみえる。こうしたことから、Menon もまた、この小説を一概に恋愛小説と呼ぶことはできないと言っている。<sup>3</sup>

最後に、Elinor と Marianne の関係に着目しておきたい。Dashwood 姉妹の関係は親密で、その絆は時に、同性愛感情を読み込みたくなる程強い。<sup>4</sup>「分別のある」姉の Elinor は、Marianne が Willoughby と交際中も、妹の無分別な愚行をとがめることなく、妹をかばう。たとえば Lady Middleton からカードゲームに誘われ、非常にぶしつけな態度で断る Marianne について Elinor は次のように言う。“Marianne can never keep long from that instrument you know, ma'ma, … and I do not much wonder at it; for it is the very best toned piano-forte I heard” (Chapter 23)。Elinor は Marianne のためを思っていることがわかるが、このように Marianne を守護する姿勢が Marianne の sensibility を助長していたとも考えられる。

Elinor の妹への思いは彼女が Willoughby と別れた際にも表れている。この時 Marianne は、Elinor が Edward に秘密の婚約者がいることを知って悲しんでいるのを知らずにいたので、姉に対して “you must be happy; Edward loves you … and only you. You *can* have no grief” (Chapter 29) と行ってしまふ。この言葉に対し、Elinor は、“I *can* have no pleasure while I see you in this state” (Chapter 29) と Marianne をやさしく諭している。この点についても、もしこれまでに、Elinor が Edward と Lucy の秘密の婚約のことを話していれば、Marianne はもっと分別ある行動を取ったことは間違いないと思われる。このように、姉の妹への態度には過剰ともいえる程妹を守ろうとする愛情が感じられるのである。

一方 Marianne の行動にも、姉への強い思いがうかがえる。きわめて「多感」に行動しているようにみえる Marianne だが、Austen は小説の冒頭で、彼女を次のように紹介している。“Marianne's abilities were, in many respects, quite equal to Elinor's. She was sensible and clever” (Chapter 1)。その彼女が感情的になって行動してしまう理由の一つには、彼女にも Elinor に負けない程の教養があることがあげられる。音楽や絵に関してとても知識のある Marianne は、才能ある Elinor の絵が自分たちより教養の無い人々によって

馬鹿にされたことに対して、まるで自分が傷つけられたように腹を立てるのである。

Marianne could not bear this. — She was already greatly displeased with Mrs. Ferrars; and such ill-timed praise of another, at Elinor's expense, though she had not any notion of what was principally meant by it, provoked her immediately to say with warmth.  
(Chapter 34)

そして、彼女は Elinor を慰めるために、周りを気にすることなく次のように言う。“This is admiration of a very particular kind! — what is Miss Morton to us? — who knows, or who cares, for her? — It is Elinor of whom *we* think and speak” (Chapter 34)。Elinor は Marianne が考えるほどショックを受けていないので、彼女の行動は明らかに行き過ぎなのだが、Marianne は、無教養で不躰な人々から姉を一人で守ろうとして、このような行動を取るのがある。このように彼女の行動は感情的に見えるが、それは姉に対する思いやりの現れでもあることを忘れてはならない。

いずれにしろ、Dashwood 姉妹の行動を見ていくと、彼女たちの姉妹としての繋がりはとても強く、お互いが互いを補い支え合いながら過ごしてきたことがわかる。Elinor は「分別のある」人物とみなされ、異性に関しても分別ある対応をしなければならないという気持ちがあるので、自分の感情を正直に表現出来ないでいる。Marianne はそんな姉に代わって行動し、発言をしていると考えることが出来る。その過程で姉妹はお互いに影響を与えながら、次第に *sense* と *sensibility* の両方の属性を程よく備えた女性に成長することができる。このように、異性への愛をはるかにしのぐ彼女たちのシスターフッドは、通常の姉妹関係の枠を越えているとみなすことができるかもしれない。

*Sense and Sensibility* は、一見すると Dashwood 姉妹を中心に、男性たちとの関係を読み解いていく小説のように考えられがちであるが、彼女たちの

性格、行動を読んで行くと、恋愛小説とは言い難い要素がたくさんある。実際に彼女たちが小説の最後に結婚した異性との関係については、小説の途中で恋愛に進展する過程が描かれることがほとんど無い。また結婚についても自分が望む相手とするというよりは、家族が幸せになるために相手を決めている、ということも読み取ることが出来る。

以上のように Dashwood 姉妹にとっては、異性との関係よりも家族、そして姉妹の関係の方が大事であることがわかる。そして異性との関係において Elinor と Mariann は、お互いに欠けていた sense と sensibility を補い合い、その異性との関係を通して姉妹の絆をより強いものとしている。それだからこそ、*Sense and Sensibility* においては、姉妹関係がひときわ彩りを放っているといえるのである。

#### [注]

- 1 この点に関しては、Auerbach の “An Excellent Heart: *Sense and Sensibility*” を参照。
- 2 sensibility については、“quickness and acuteness of apprehension or feeling” という OED の定義に依拠して議論を進めている。
- 3 この点については Menon の “*Sense and Sensibility and Mansfield Park: At Once Both Tragedy and Comedy*” を参照。
- 4 男性との関係よりも女性との関係の方が重要視されており、彼らの関係は単なる姉妹の関係の枠を越えてホモエロティックでさえある、と Sedgwick は指摘している。

#### Works Cited

- Auerbach, Emily. “An Excellent Heart: *Sense and Sensibility*.” *Bloom’s Modern Critical Views: Jane Austen*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 2009.
- apRoberts, Ruth. “*Sense and Sensibility*, or Growing up Dichotomous.” *Bloom’s Modern Critical Views: Jane Austen*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986.
- Austen, Jane. *Sense and Sensibility*. London: Penguin Classics, 2003.
- Menon, Patricia. “*Sense and Sensibility and Mansfield Park: At Once Both Tragedy and Comedy*.” *Bloom’s Modern Critical Views: Jane Austen*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 2009.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. “Jane Austen and the Masturbating Girl.” *Jane Austen’s Sense and Sensibility*. Ed. Claudia L. Johnson. New York and London: W. W. Norton, 2002.